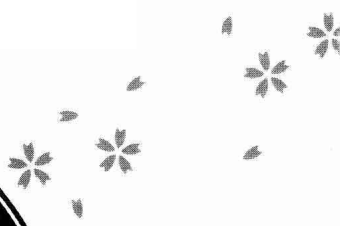


人生折々の
哀歌

岡本英雄

発行 日本図書刊行会
発売 近代文芸社



人生折々の 哀歌

岡本英雄

発行 日本図書刊行会
発売 近代文芸社

じんせいおりおり あいか
人生折々の哀歌

1998年4月30日 第1刷

著 者 岡本 英雄（おかもと ひでお）

発 行 株式会社日本図書刊行会

発 売 株式会社近代文芸社

東京都文京区目白台2-13-2

TEL (03)3942-0869

FAX (03)3943-1232

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

製 本 小泉製本所

© Hideo Okamoto 1998 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-89039-976-3 C 0095

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

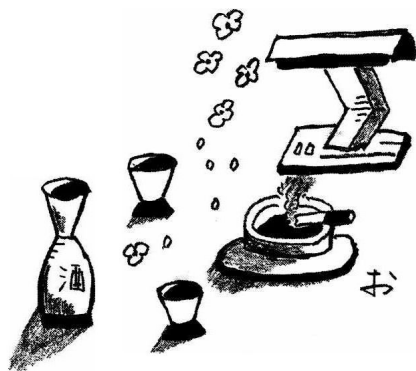
人生折々の哀歌

コノサカヅキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

勸 酒

勸君金屈卮 滿酌不須辭

花発多風雨 人生足別離（于武陵作、井伏鱒二訳）



イラスト・著者

まえがき

アナトール・フランスに「東方の王さま」という話がある。

東方の王さまが、父のあとを継いで王位に就き、善政をしくためには、人間の歴史を知らねばと、ある学者に命じた。その学者は、五百巻の歴史書を持って来たが、国王は国事に忙しく読むいとまがなく、もっと要約して来るよう命じた。

二十年後、その学者は、その歴史書を五十巻にまとめてやって来た。だが、国王は既に老齢で、到底そんな浩瀚な書物を読む時間はなく、再び、それを要約するよう命じた。

また、二十年が過ぎた。そして、今では彼自身も年老い、白髪になった。博士は、今度こそ国王所望の知識を、僅か一卷に盛った書物にしたと、自信を持って持参した。

だが、その時、国王は既に、死の床に横たわっており、今はその一卷をすら読む時間もなかった。結局、博士は、人間の歴史を僅か一行にして申し上げた。

それは、こうだった。「人は生まれ、苦しみ、そして、死ぬ」と。

人生の意味など、そんなものは何もない。そして、人間の一生もまた、何の役にも立たない

んだ。生まれて来ようと、来なかつと、生きていようと、死んでしまおうと、そんなことは、一切何の影響もない。生も無意味、死もまた無意味なのかも知れない。

古代ギリシャの哲学者タレスは、日蝕を予言したことで有名である。彼は母親からしつこく結婚しろと言われた時、

「母上、わたしはまだその齡ではありません」と答えている。しかし、それから数年後に、再び母親から「結婚しろ」と言われた時、

「母上、わたしはもうその齡ではありません」と答えたそうだ。

ただし、これには異説がある。タレスは結婚はしたが、子供は作らなかつたともいう。なぜ子供を作らないのか、と問われて、「子供を愛するからだ」と答えたというエピソードも伝えられている。

生まれて来ることが苦しみであり、子供に気の毒である、この哲学者は考えていたのだろうか。なるほど、そう言われるとそのような氣もする。

「徒然草」も言う。

「わが身のやんごとなからんにも、まして数ならざらんにも、子といふものなくてありなん」高貴な身分であっても、下賤な身なら尚更、子供はない方が良い、と。

夫婦の相性が悪いと、子供の犠牲を顧みずに離婚する人もいる。爪に火を灯すが如くして、

財をなす人もいる。時間の内外を問わず上司にへつらい、部下を脅してでも、地位、階級、権力を追求める人もいる。貧乏人のくせして、ものへのこだわりがなく、周囲の白眼を気にせず自ままだに生きている人もいる。社会人としての成果はあがらないくせに、営々として家族を大切に、仕事に励んでいる人もいる……。

箱根山 駕籠に乗る人 担ぐ人 担ぐ草鞋を作る人 脱いだ草鞋を拾う人
生き方とは、人の数はどれだけのだろう。

社会生活三十年、人生の黄昏に至りて思う。

生き方はさまざまにあらうし、どれが良くてどれが悪いと一概には言えない。しかし、少なくとも、周囲の眼ばかりを気にして、その毀誉褒貶に踊らされ、人によく思われたいことを基準に自分の行動を律するのは、いかなものか。

結果はどうあっても、苦しくても、孤独にさいなまれても、自らのうちなる声に耳を傾ける生き方を良しと思う。その結果としての形は、千差万別であろうが。

そんな生き方に少しでも近づきたいと、今日まで来た。

そして、既に齢を重ね、人間は生まれ、苦しみ、そして、死ぬ”という心境に、得心する境涯となった。人生は、自らの意志で絵模様を織りなす一枚のペルシャ絨毯に過ぎない。人間として生まれて来た以上、その短い人生を自分らしく、思うさまに描き、生きなければと悟る。

今日まで生きて来る道すがらには、幾多いくたの辛酸しんさん勞苦ろうくを味わうこともあった。その折々に、
往昔おうせきの人々もかくやあらんと、心打つ句歌に接し、おのれ独りの身にあらざと、励まされ、心
慰められた。

そして、今日既に五十路いそじの坂を越え、迎え来る老年と辞世の心の有りようを、また、先人に
聞かんと思う。

そんな、忘れ残りの句歌などを、つれづれに記してみた。

平成十年四月

大津にて

岡本 英雄

人生折々の哀歌——目次

まえがき..... 3

青年期..... 11

志..... 15

孤独..... 26

恋..... 33

壮年期..... 39

仕事..... 42

上司..... 43

中間管理者..... 48

ごますり・昇進..... 55

自嘲..... 62

酒・煙草..... 76

懐旧かいきゅう

無常・無情

季節

死を想う

辞世

無念むねん

天晴あっぱれ

滑稽かき

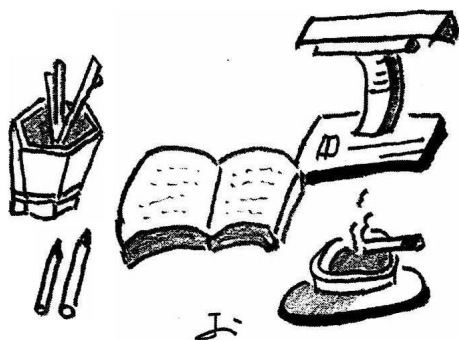
諦観ていかん

あとがき

引用及び参考文献

句歌索引

青
年
期



青春の目は、透き通る、そして、傷つき易い硝子^{やす}だった。

生活のために手を汚すことがなかったから、世の中のは非善惡が快刀乱麻^{かいとうらんま}を断つが如くに分かった。それがために、ことさら正義感が燃え立^たつたし、清濁併せ^{あわ}呑む^の大人を腰抜けと輕蔑もした。

俗人的權力に真^まつ向^むから立ち向^むかつた一休に、万雷^{ばんらい}の拍手を送^{おく}つた。点取俳諧^{てんとりはいかい}の拝金主義を徹底して嫌い、〃無能無芸にして、只此一筋^{ただこのひとすじ}に繋^{つな}がる〃と、あえて世を背^{そむ}き、清貧を貫いた芭蕉を師とも仰^{あが}いだ。

この身の続く限り、義を押し通^{とお}すこと。〃死してのちに已^やむ〃をよしとして、生きた青春時代であつた。

「斃^{たお}れても 弓矢はすてぬ 案山子^{かかし}かな (山岡鉄舟)」

イエス・キリストの生涯は、三十年余の短いものであつたが、魂^{たましい}の叫びとも聞こえる珠玉^{しゆぎよく}の如き片言隻句^{せうく}に、胸をときめかし、夜の白むのを忘れて讀んだものだった。

姦淫^{かんいん}した女が、多くの民衆に囲まれ、石で打たれているさまを見て、〃この中で罪のない者

だけが石で打て”とイエスは言う。女人の姿を見て情欲を覚えるのさえ罪とする立場からすれば、神に対してやましさを罪悪感を抱かない者がいようか。何人も罪人であるとするイエスの考えは、厳しくも、きわめて自省的である。

イエスの十字架上での最後の言葉、“神よ、神よ。我を見捨て給いしか”に、彼の人生の集約を聞く思いがした。

あれだけおのれに忠実に、魂の声に耳を傾けた生き方は、肉体的にも精神的にも、耐え切れない緊張の日々であったことだろう。かなうことなら一日も早い結末を、しかも、清らかな生き方の延長の果てにと思うのは、生身の人の思いであろう。

“最後まで耐え忍ぶ者は救われる” 明日のことを思い煩うな。明日のことは、明日自身が思い煩うであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である” という言葉は、イエスが終生、自らに言い聞かせ続けた言葉ではなかっただろうか。

イスカリオテのユダは、イエスを裏切りローマに売ったとされるが、彼こそがもっともよくイエスの内心を理解していたのではなからうか。イエスの心情、深奥の苦しみをよく理解していたからこそ、自ら後世に汚名を残すことを承知しながら、イエスの人生の幕引役を買って出たのではなからうか。

もし、イエスが、七十年、八十年の人生を送ることがあったら、きっと一介の哲人か修行僧として論じられ、よもや“神の子”とは人の目に映ることはなかったことだろう。

そんな青春の純真な夢は、砂上の楼閣のように脆く、荒唐無稽なものかも知れない。それは、社会生活の中で一皮ずつ剥がされ、潰えるものかも知れない。しかし、もし、青年期に理想や夢を描けないとしたなら、それはただ、時流に身を任した、おのれのない人生で終わるのではなからうか。

「憂きことの　なおこの上に　積もれかし　限りある身の　力ためさん」